

## 子どもから高齢者まで地域の人々が交流できる場と仕組みを提供する多世代はうす。

地域の人々が集まり、自由な発想と主体性のもと、さまざまな交流活動ができる場所を作りたいという思いで始まった多世代はうす。土地の歴史とともに年月を重ねてきた古民家が、その舞台になろうとしている。「結」の伝統が残る里山の中で、豊かな地域づくりが展開されていた。

### 築200年の古民家が生まれ変わる。

見渡す限りに広がる水田は、何とも言えず心を癒してくれる。栗駒山の南東麓に広がる宮城県栗原市は、2005年に旧栗原郡の10町村が合併して誕生した市で、約800km<sup>2</sup>という面積は県内最大を誇る。その一角、里山の光景を色濃く残す文字地区に、築200年という古民家がある。「08年の岩手・宮城内陸地震でも、今回の東日本大震災でも、昔のしっかりとした家はやはり強いんだなと実感しました」と語るのは、この古民家を「多世代はうす」に再生するプロジェクトを進行中のNPO法人 くりこま高原・地

球の暮らしと自然教育研究所 文字倶楽部代表の馬渡達也さん。

多世代はうすが目指しているのは、子どもから高齢者まですべての世代が集い、一緒に学び合うことができる場である。自分が育ったように子どもを育てていけばいいという、いわば当たり前のようにして受け継がれてきた子育ての世代間伝達が、個人的なレベルでも、社会的なレベルでも困難になりつつあるのが現状である。家族や地域の中に存在していた子育ての世代間伝達を多世代はうすを通じて再生したいという思いが、馬渡さんたちの文字倶楽部にはある。

関係者やボランティアスタッフの手によって古民家の改修は続いているが、そこでの活動の柱となるのは、多世代はうすの中にさまざまなクラブ活動を作り、いろいろな体験の場を設定すること、コミュニティカフェの「田舎っふえ」を作り、交流や情報交換の場とすることである。さらにもうひとつが、化石燃料に頼らない暮らしの実践であり、現在、多世代はうすでは車のガソリン以外、化石



古民家を利用した「多世代はうす」



助成を受けて設置した薪ストーブ

燃料は使用していないという。「今回の大震災で灯油が手に入らなくなりましたが、地域のみなさんに薪ストーブで暖をとってもらいました。また、スーパーには商品がなくなりましたが、畑の野菜を融通し合っしてしのぐことができました。多世代はうすを通じ、震災に強い地域づくりやライフスタイルの提案を一層、力を入れて発信していこうと考えています」と、馬渡さん。

### 三世代が楽しく集う交流の場に。

クラブ活動の中心的なものは、乳幼児を対象とした「森のようちえん」、小学校低学年を対象とした「森の小学校」、家族を対象とした「創育くらぶ」と「Kids Cooking Club」である。最近、社会的にも注目されている森のようちえんは、デンマークで1人の母親が自分の子どもや近所の子どもを集めて森の中で保育したのが始まりとされ、自然の中での幼児教育や保育に共感するスカンジナビアやドイツ、そして日本でも広まりつつある。



乳幼児を対象とした「森のようちえん」



自然の中で遊びながら学ぶスタイルは最近注目されている

### 担当者より



社会貢献として  
評価してください。  
ありがとうございます。

NPO法人 くりこま高原・  
地球の暮らしと自然教育研究所  
文字倶楽部代表  
馬渡達也さん

助成を受けて設置した薪ストーブが、今回の大震災で役立ちました。使途に細かな縛りがない貴団体の助成は、私たちのような弱小団体には極めてメリットが大きく、今後、数年の活動の見通しも立ちました。これを励みに、今後も場づくりに邁進します。

「昨年度は20回ほど開催しました。参加者は1回あたり5家族、15～20名ほど。なかには毎回のように参加する家族もいます。ここから2時間圏内に住む人がほとんどです。自然の中での体験学習がメインで、基本的に子どもたちがやりたいことを好きにやって、それを大人が見守るというスタイル。『それはダメ』という禁止語は一切、使いません。自主性や段取り力が増してくるし、危険を察知する能力も身につけてきます」

森の中で遊ぶうちに子どもたちの表情がどんどん変わってくると、馬渡さんは言う。また、子育てなどの情報交換を通じて、親同士の交流も深まるという。なかには、子どものためではなく、自分のために来ているという母親もいるそうだ。

もうひとつの柱である田舎っふえ作りは、現在、整備の真最中。こちらは手作りの石窯を使って自分たちでパンやピザを焼き、それを食べながらの交流がメインとなるが、去年は地元の老人クラブの方々がピザを食べたいとやってきたという。

「ゆりかごから墓場までカバーすることをモットーに、多世代はうすを通じて、地域の人々が交流できる場や仕組みづくりに、これからも取り組んでいきたい」

そう話す、馬渡さん。今後も多世代はうす、そして文字倶楽部が地域づくりのコーディネーターとしての役割を果たしていくに違いない。